

佐藤綾子

はじまりの家

悲しむのに時があり、
笑うのに時がある

佐藤綾

は
じ

江苏工业学院图书馆

藏书章

藏
の
家

悲しむのに時があり、
笑うのに時がある

はじまりの家

悲しむのに時があり、笑うのに時がある

2004年5月31日初版第1刷発行

著者：佐藤綾子

発行者：杉本 孝

発行所：NTT出版株式会社

〒153-8928 東京都目黒区下目黒1-8-1アルコタワー

営業本部：Tel 03-5434-1010 Fax 03-5434-1008

出版本部：Tel 03-5434-1001 <http://www.nttpub.co.jp>

ブックデザイン：土屋 光 (Perfect Vacuum)

印刷・製本：図書印刷株式会社

ISBN 4-7571-5048-2 C0095

乱丁・落丁本はおとりかえいたします。

©2004 SATO Ayako Printed in Japan

定価はカバーに表示しています。

も
く
じ

序 章	私たちは神様のオーダーメイド	5
-----	----------------	---

第一部

第一章	私の生き方は「ブルマー」	15
第二章	異端児からパイオニアへ	23
第三章	お母さん、ごめんなさい	45
第四章	神様との出会い——キリスト教にめぐめて	59
第五章	新しい喜びをみんなに	72
第六章	オール・マイ・マザーズ——みんなが私のお母さん	84

第二部

第七章	ゲンちゃん、土地を探すわよ！	91
-----	----------------	----

第八章 家づくりはシンプル&エレガント 103

第九章 家づくりの現実——お金は？ 施工は？ 115

第十章 「家づくり」は「チームづくり」 137

第十一章 チームプレーは心の結びつき 158

第十二章 桜上水の人々 166

終章 みんなが待ってる「優」と「愛」の結晶 178

あとがき 生きる喜びは「敗者復活」の心から 185

序 章

私たちは神様のオーダーメイド

私は最近三つの「大発見」をしました。そのことはある意味では皆が分かっているようにうでいて、もしかしたら本当には分かっているのではないのか。そしてこの三つの発見をどちらかと言うと（と言うよりどう言っても）「中年」になった今、がっしりと手につかんだことが嬉しい。そしてこのことはきつと私の多くの読者にもスカツとする励ましになるのではないか。そんなことを思ったのが本著を書くきっかけであり目的です。本当にお役に立ったらいいな、と思います。

まず第一の発見は、「強者は弱者で、弱者は強者だ」ということです。社会で成功していかにも強そうに見える人が、実は内心にどうすることもできないような恐れ of 感情

をかかえている弱い人であり、その弱さを人に見せまいとして外見的にはより一層強く見せている、ということは意外に多いのです。

一方で、貧しくて身体も弱くて、話して声も何かボソボソとして頼りなく、どう見ても「強い人」群には入りそうもない人が、失業したり肉親を失ったりする中でも粘り強く立ちあがり、自分のできる最大範囲で人助けができる、そんな「強い人」だったりします。

本当にその人が真に強い人か、弱い人か、それはなかなか外見の行動ではわからないものです。その理由は外見にその人の強さや弱さがストレートに出るほどに、私たちの心理的しくみが単純ではないということがまずひとつあります。

私の専門であるパフォーマンス学は、その「人間の本心と外見のかかわりの秘密」にもっとも深く関わって、真相に切りこむ最たる技術（スキル）あるいは視点（ビューポイント）だといえるでしょう。

実は、そんなことを日頃研究したり教育したりすることを生業なりわいにしている、一応は心理学博士でもある私自身が、このたび青天の霹靂へきれき「強く見える人は実は弱い人である」どころかもっと深刻な事実として「強い人は弱い人である」という方程式を身をもって

実証してしまうことになりました。

恥ずかしながら私は、「パフォーマンス学のバイオニア」、「第一人者」などと呼ばれて、どちらかというと封建的で保守的で石頭の日本の学界、ことに心理学系の学会で、いかにも強い意志と鉄の実行力、馬車馬のように絶えず持続する努力で二十年以上を突っ走ってきました。だから自分では自分のことを、さすがにかよわい女の身で「強い人」とは言わないまでも、「決して弱虫ではない人」ぐらいには思っていました。

弱くて泣いてばかりいるわけではもちろんない。けれど時々弱さの自覚はあっても、世の中で一応大学教授もして、著作は百冊を超え、何しろ日本に影も形もなかったパフォーマンス学を創りあげてきたのだからそれはそれなりに気丈なところもあり、強靱な精神力がないとやってこられません。「弱虫ではない」という自己評価は、そう突拍子もないというものでもない、と思われたのです。

でも二〇〇一年初頭、五十四歳の私はその判断がどんなにいい加減でバカバカしいものだったかを、それこそ全身全霊をコンクリートの上で、木っ端微塵に打ち碎かれるほどの悲しみと痛みと絶望の実感を持って知ってしまったのです。

そのプロセスはあとの章に譲りますが、そのとき、とにかくはっきりと分かったこと

は不変的、絶対的に「強い人」なんていないということ。多くの人が、私がちょうどそうだったように、自分で自分の弱さに気づいていないだけだということ。そして、とても逆説的になってしまふのですが、その後の自分の気づきと立ち直りを通して（これもあとで詳述しますが）生きる喜びをしつかりと両手の中につかんでみると、弱さをとことん知った人は何も恐れを知らなくて強かったときとはまた別の強さを持つことができるのではないか、という発見が私を驚かせています。

しかも、この強さはもう消えることのない強さです。今、私の中にある弱さと背中合わせにある強さは、人間がとても小さい生き物だけれど恵みに満ちていて、それを身のまわりのできる限り多くの人々に分かち合っていけたらステキだな、という希望に満ちた強さです。

希望がある限り人間は元気で生き続けられる。毎日生きること、仕事をする、すべての中にひとすじの光が溢れてさんさんと降ってくる。それは喜びであり、生きる力の強さです。

第二の発見、それは「誰にでもその人にしかできない神様特製、つまりオーダーメイドの使命があり、だから生かされているのだ」ということです。

自分が生きて誰かの役に立っている、その発見を人は「使命感」（ミッション）と呼びます。一般的には社会で成功している人ほどその人の仕事や地位にまつわる使命感が大きい、そのことを私はこれまで多くの経営者や政治家とかかわる自分の仕事を通じて実際に見てきました。けれど、「弱さの中にある強さ」を知った今、どうも「使命感」とは、そんなものではないらしいということにも気づいたのです。

身体が不自由で車椅子でしか移動できない人の中にも、その人だからこそ誰かの力強い励ましになり得る、という自覚があれば、それはその人の立派な使命でしょう。パソコンがまるでできなくて計算力もまるきりゼロでも、その人にもしも「そばにいただけでまわりの人が明るくなる」という能力があり、いつもそのことを彼が自覚していれば「明るく人を励ますこと」は充分使命となり得る。

使命はその人なりのサイズや種類であっていい、つまりその人を創ってこの世に送り出して下さった神様のオーダーメイドだ、ということです。極端に言えば世間的なハカリではかって「何もできない人」と思われている人でも、実は生かされている大きな意味があり、そのことに本人が気づいた瞬間に、それはその人が生きる希望をつなぐに足る使命感と一体になるということ。これはなんとという喜びでしょうか。

極論すれば貧乏とか頭が悪い、顔が悪いなんて、実は「現象」であって、生きる私たちの魂を揺さぶって、エネルギーのもととなる喜び、そして喜びから自覚的に発生する使命感とは、何のかかわりもないことです。誰にでも使命があることに気づくこと。これはすばらしいことです。

そして第三の発見は「使命の自己表現を生活の中できちんとすることの大切さ」です。つまり、自分の中の強さと弱さを自覚したところから、何がしかの使命をつかんだら、そのことを絵空事にしておいては人生意味がないということ。使命は、あなたや私の生きる日々の形、ものの言い方や、ひいてはライフスタイルにまで結晶したときに初めてその人の日々の活力や健康や夢になって多くの人々の心に、そして何よりも自分自身の心の奥底に大きな光をともしてくれるに違いない、ということです。

よく心理学者である私たちの発表材料にもなることです。机の上が雑然としていて、部屋に足の踏み場もないような時は、その人の生活が荒れすぎている、と言われます。心がすぎんでいる時、服装もだらしくなくなり、心が荒れていれば顔つきも陰しく言葉にも毒ばかりが含まれてしまう。逆に心に喜びや使命感が溢れていれば、それはその人のライフスタイルとライフステージ、すなわち「生活の場」に反映して当然のことです。

よう。世間ではよく「あんなに収入の多い人がこんな粗末な家に住んでいるのは意外だった」などと言います。けれど、その判断こそおかしいわけで、もともと収入の大小はその人の人生観を語るものではないわけですから、例えば「世のため人のため多くの人とかわって生きよう」、という人生観の人が、誰も取り付くシマもないような閉鎖的で威圧的な家に住んでいれば、そのとき初めてその人の人生観とライフステージの間に齟齬が生じるのだ、と私は思います。

このたび私は中年になって、パフォーマンス学を通して人々の幸せに貢献したいという私の使命を再確認して、しかもそのパフォーマンス教育を地域に根ざしたものととして広げたいと思いました。

まず自分の活動母体である自分の事務所と自宅を一体化して、その建物の一部を地域の人々のために使いたいと考えて、それを実現するための建物をつくりました。地下一階地上三階の四階建てで、地下一階をセミナーやカウンセリングのための小ホールとして、地域の人々と共に働き、学び、暮らす家です。もちろん、一人の力でできたものではありません。家づくりの専門家たちのすばらしいチームワークの賜物です。そして、私自身の意思の強さやお金の力からできたものでもありません。これは弱さから誕生した

確かな一輪の花です。そしてこの家のコンセプトをスタートの時点から「シンプル&エレガント」に置きました。このコンセプトを形にして下さったのは土地探しから設計、建築、設備と目の回るように複雑な作業とプロセスを時に厳しく、でも常に笑いとユーモアと夢をもつて共に歩いて下さった建築家の村口昌之先生、三菱地所ホームの皆さん、牧師さんや数えきれないほどの関係者たちです。なぜそんなことをしたのか、その理由も本著の中でおいおい書いてゆくことにしましょう。

本著は、私の三つの発見が暮らしに結晶したことのお物語です。読者のあなたのちょっとした励みと笑いとユーモアのもとになればとても感謝です。

第一部

